

黑板勝美研究の可能性

佐藤雄基

本シンポジウムは、近代日本を代表する歴史家の一人である黑板勝美（一八七四—一九四六）の再評価を意図し、二〇一五年十二月十九日に立教大学において開催されたものである。本学の日本学研究所および史学科を中心にして、立教SFR「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」（代表者：小澤実）という共同研究が二〇一四年度から行われている。西洋の学知が日本の歴史学に及ぼした影響について検討を進めるとともに、日本の歴史学が欧米やアジア諸国に及ぼした影響にも関心をもっており、国際的な環境のもとに日本の近代歴史学の展開を考えなおすことを目標としている。これまで平泉澄、朝河貫一、三浦周行などの歴史家に注目し、研究会を催してきた。

今回取り上げる黑板勝美は、これらの歴史家とも深い関係をもち、多面的な活動を実践してきたがゆえに、近代日本における歴史学のあり方を考えるときにキーパーソンとなる人物である。だが、その多面性とテーマの広がりゆえに、全容の把握が困難であったためか、従来その全体像をめぐる研究は必ずしも十分に行われてこなかったように思われる。

しかしながら、日米双方において近代史学史に関する関心が近年高まりつつあるなかで、黑板についても新たな研究の機運が生じつつある。今回は、佐藤雄基（本学教員）を司会として、日本およびアメリカにおいて黑板勝美と近代歴史学をテーマにして博士論文を執筆した廣木尚氏とヨシカワ・リサ氏のお二人をお招きして、それぞれの問題関心や研究についてご報告いただいた。司会は佐藤がつとめ、コメントーターは明治期の歴史編纂事業について新たな研究領域を切りひらいた松沢裕作氏

にお願いした。日本では史学史は従来必ずしも盛んなテーマではなかったが、日本とアメリカそれぞれで日本近代史学史をテーマにした若手研究者お二人を招くことで、今後の国際的な史学史研究の方向性について議論する場をつくることを企図した。

ヨシカワ・リサ氏は、黑板勝美をテーマにしてアメリカ・イェール大学で博士号を取得し、現在はホバート・アンド・ウイリアム・スミス・カレッジで歴史学の准教授をつとめている。その博士論文はハーバード大学出版会から刊行が決定しており、今回の報告では、そのエッセンスをまとめつつ、黑板の多面的な活動について報告していただいた。

廣木尚氏はアカデミズム歴史学をテーマにして早稲田大学で博士号を取得し、現在は早稲田大学・大学史資料センターで助手をつとめている。黑板の多彩な活動は、同時代のアカデミズムの歴史家のなかで特異なものと思われがちである。一方で、黑板が『国史の研究』という概説書や啓蒙書を数多く発表し、アカデミズム歴史学の立場を社会的に代弁し、防波堤ともいえる立場にあったことが、廣木氏の近年の研究によって明らかにされている。今回の報告では、『歴史学の歴史』から『歴史実践の歴史』へ、というかたちで一九九〇年代以降の日本近代史学史研究の展開を整理しつつ、黑板研究の課題について論じていただいた。

本シンポジウムでは、まずヨシカワ氏に博士論文のエッセンスをご報告いただき、つづいて廣木氏に日本側の研究の現状と課題をご報告いただくことにした。ヨシカワ氏の報告は、廣木報告の最後に「喫緊の課題」として指摘された「黑板に関する評伝的研究」に相当するものであり、

それが（おそらくは日本に先立って）英文の研究書として刊行されるという点に、世界における日本史研究の裾野の広がりを感じた。

また、ヨシカワ報告の中で、とりわけアカデミズム歴史学の存続・発展のための資金獲得に果たした黒板の役割の大きさが具体的に解明された。これは、従来の史学史研究において見落とされがちな論点であるといえる。ある学問領域が「制度」として確立するためには、研究・教育機関におけるポストの設置とともに、研究費などの財政的な裏づけがなされる必要がある。このことは競争的資金の導入などで外から変革を迫られている今日の歴史学においても切実な課題であるが、近代のアカデミズム歴史学の出発点においてすでに大きな課題であった。外部に向けて歴史学の有用性を主張して資金を獲得した黒板の活動は、アカデミズム歴史学内部における黒板の「役割」について大変示唆的なものである。

この二人の報告をうけて、コメンテーターの松沢裕作氏は、「黒板勝美は、東京帝国大学を中心とする「アカデミズム」をどの程度「代表」しているのか」と問いかけた。外部資金獲得や社会的発信という黒板の華々しい活動に目を奪われるあまり、東京帝国大学史料編纂所を中心とするアカデミズム歴史学の実態がブラックボックス化してしまわないかという問題提起は、今後の史学史研究の課題を提示するものであった。その後の全体討論では会場からも多くの質問が出て、活発な質疑が行われた。多様な論点が出されたが、とりわけ黒板とそれ以外のアカデミズムの歴史家（辻善之助など史料編纂所の歴史家）との「役割」分担のあり方が焦点となった。廣木報告のなかでも指摘され、近年山口道弘氏によつて思想的研究が進められているように、三上参次や辻善之助ら「寡黙」な史料編纂所の歴史家たちに関する研究も今後の課題となろう。日本近代の史学史研究がなお多くの課題に富む領域であることがあらためて示された。

本シンポジウムを終えて、あらためて思うに、多様な歴史実践の中に

において日本のアカデミズム歴史学がたどった（決して国民国家論一般に解消されない）道のりは、近代日本のヒストリオグラフィイの特徴を示唆するのか、諸外国における近代歴史学の道のりを考える際にも示唆的な視点を提供するものでもあるのか。両側面について比較史学史の視野から考える必要があるうし、海外の研究者にも日本の近代史学史に関心をもってほしい。そのような点からも、ヨシカワ氏の著書の刊行が待ち望まれるところである。

（さとうゆうき 本学文学部准教授）